

## 浅香幸雄先生のご逝去を悼む

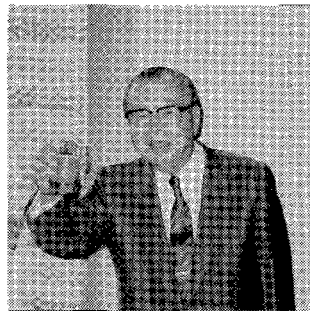
歴史地理学会初代会長で同会名誉会員、日本地理学会名誉会員であり、筆者の恩師でもある浅香幸雄先生は、1994年7月24日、脳梗塞のために急逝された。享年84歳、若い頃剣道やボートで鍛えられた先生にとっては、幽冥境を異にされるには早すぎるお年であったが、これが運命と諦めねばならないのであろうか。東京教育大学大学院で懇切なご指導をいただいて以来、約30年の長きにわたって常に身近かにご鞭撻を賜った者として、誠に悲しく残念でならない。ここに、心から哀悼の意を捧げたい。

先生は富山県砺波郡那戸村のご出身で長男であられたが、勉学の志強く、東京高等師範学校から東京文科大学地学科地理学専攻へと進学され、内田寛一教授の門下生として歴史地理学の研究法を学ばれた。1936年3月卒業と同時に第二東京市立中学校へ奉職されたが、ご逝去の後に小平のお宅を訪れた際、奥様から先生は教育者としての責務を十分に果たされた上に、学者への道を強く求めて歴史地理学研究に情熱を傾けられていたことをうかがった。

1942年5月には朝鮮総督府水原高等農林学校教授として単身赴任され、後に京城帝国大学付属理科教員養成所教授を経て、1944年11月には母校の東京高等師範学校教授に迎えられた。第二次世界大戦後、東京教育大学助教授、同教授を勤められて1974年3月に停年ご退官されるまでの30年間は、先生は研究者としては農村、宿場町、信仰登山集落などの近世歴史地理学の実証的研究に精力を注がれた。

同時に先生は、歴史地理学会の前身である日本歴史地理学研究会の発足にもかかわって、菊地利夫先生とともに学会の基礎固めにご尽力された。1962年4月から4年間は同会常任委員長、そして1966年4月、歴史地理学会発足と同時に初代会長に選出され、以後8年間にわたって学会の運営に取り組まれた。研究会当時の財政難に鑑み、財団法人畠山文化財団から毎年多額の助成金を受けられるようにご配慮いただき、それは今日に至るまで引き継がれている。

一方、先生は地理教育者として学生や教員の再教育にも心を配られ、多数の出版物を通じて地理教育の普及に尽くされた。そうした中で、修学旅行や歴史事象の観光資源化を提言された文章が観光関係者の目にとまり、1960年以後、日本観光協会の専門員



として観光地診断にかかわることになった。47カ所もの観光地を調査して、地域性を前面に出した教養観光の導入をいち早く具体的に示されたことは、先生の観光研究上の大きなご貢献であろう。筆者もたびたび観光地調査に同行し、先生が地域の真の発展のために全力を傾けられる姿勢に深く感銘した。福島県田島町の青少年旅行村調査の際には、先生は交際の広さと持ち前の実行力をもって神奈川県当局に紹介され、山村と都市の交流を始められて、それは今に続いている。思い起こせば、三重県の大杉谷から大台ヶ原へとご一緒に歩き、沿道のご説明を受けたこと、同室の宿で早朝目を覚ますと、すでに机に向かって原稿を書かれていたお姿や、野外実習で蔵王に立ち寄った時には、あまりのゴミの散乱に自ら拾い始められたことなどが目に浮かび、先生のお人柄が偲ばれる。

先生は、いつもにこやかな笑顔で誰にでも接しられ、学閥に関係なく学位を授与されるなど、お心の広い方であった。日本観光学会会長を長く引き受けられ、ご退官後も専修大学教授、北陸工業高等専門学校長、富山県教育委員長、砺波散村地域研究所長などの要職を歴任されたことは至極当然のことであった。

ご逝去の後、筑波大学の奥野隆史先生のご尽力のもと、先生は勲三等瑞宝章を叙勲され、筆者がご霊前に捧げる光栄に浴した。ここに、先生の歴史地理学、地理教育、観光学における偉大な業績の一端を振り返り、学恩に深謝するとともに、先生のご冥福をお祈りして、拙文の筆を置きたい。

(山村順次)

(写真は1988年6月11日、日本観光学会懇親会にて)